

## 成果報告書

記入日 2024 年 5 月 1 日

フリガナ (スミダ テツロウ ) 氏名 角田哲朗	渡航先国名・地域 イラン	所属機関 京都大学文学部博士後期課程
研究テーマ： ポスト・モンゴル期イランにおける宗教政治的権威の研究ー フルーフィー教団のメシアニズム思想の展開 ー		
研究期間： 2022 年 4 月 ～ 2024 年 3 月 ( 2 年 0 ヶ月)		
研究成果 (概要) 本研究課題は博論執筆のため、イラン本国での研究成果の吸収と各地の写本図書館での写本史料の調査が主たる目的であった。課題は十二分に達成された。		
研究成果 (詳細) 報告者は、ポスト・モンゴル期イランのメシア主義解明のため、2022 年 4 月から 2024 年 3 月までの期間において、イラン・イスラーム共和国の首都テヘランにあるテヘラン大学文学部歴史学科にて、受け入れ教官のマンスール・セファトゴル教授の許、フルーフィー教団のメシア主義思想の史的展開について研究を進めた。 報告者は留学までの研究として、ポスト・モンゴル期イランのメシア主義運動に関して、特に当時に断続的に出現したメシア自称者の著した文献を読解する手法を通じて、彼らのメシア自称の論理を解き明かす研究を進めていた。そのため、イランとトルコでの資料調査をそれぞれ 1 度行い、関連する写本資料の収集に当たった。トルコでの資料調査は極めて簡便であり、必要資料も概ね入手できたが、イランの方は一筋縄ではいかず、数点の資料を入手するに留まっていた。イランでは数週間の渡航での資料収集は困難であり、担当者との交渉が必須であった。また、コロナ期間を挟んで利用方法が異なっていた可能性も見込まれ (実際に異なっていた)、イランに長期滞在しつつ、独自にノウハウを構築する必要があった。その甲斐もあり、今回の留学では関連写本資料について期待していた資料は概ね入手することができ、更には従来は想定していなかった資料を発見するという幸運にも恵まれた。 以下に具体的な研究成果について記す。 報告者の研究課題では、フルーフィー教団の創始者ファドルッラー・アスタラーバーディー (1394 年没) のメシア性に関して着目し、それを自称したファドルッラー自身の論理と彼をメシアと尊崇した教団員たちの視座の解明に努めた。その結果、ファドルッラー自身は己の著作でメシアを公然と自称することは避けつつも、自身の見た夢に仮託する形で、象徴的にメシアを自任していたことが判明した。また、教団員たちの著作群では、ファドルッラーはメシアとして言及されることは儘ありつつも、師とメシアを結びつける明白な論理は曖昧に秘匿されていた。要するに、ファドルッラーが教団員からメシアとして尊崇を受けていたことは揺るぎない事実でありながらも、それらは地下水脈的に外部の目からは		

見えざる形で論理化されているという公算が高いと予測された。従って、ファドルッラーのメシア性を詳細に論ずる新資料が発見されない限りは、報告者の論は具体性を欠く論証に陥る危険性があった。

結論から述べると、上記の問題を払拭する新資料の発見に成功し、報告者の課題遂行は大きく前進した。当該資料『マフディーの書』(*Mahdī-nāma* : 「マフディー」はアラビア語でメシアの意)は、従来の先行研究では一切活用されていない写本資料であり、報告者もその存在を認知していなかった一点ものの史料である。同書は同時代(15世紀)の他のメシア自称者やメシア主義者たちの論を引用してそれらを論駁し、著者独自のメシア論を展開するという、報告者の研究にとって望外の史料価値を有する資料であった。同書の執筆者は不明であるが、独特の筆記法や文体からフルーフィー教団の内部で書かれた史料であることは疑いなく、その成立年代は15世紀後半と予想される。同書では、著者が想定するメシアの身元については名を挙げて明示的に同定することは周到に避けられているが、メシアの資質として預言者ヨセフの技能すなわち夢解釈の技能が必須であると繰り返し強調されているという点から、夢解釈師として高名を馳せたファドルッラーを指していることは疑いない。その他、メシアの到来を予言する預言者ムハンマドのハディース(伝承)に検討を加え、独自の論を構築している点も史料価値が高い。一例を挙げれば、「マフディーの名は我が名と一致し、その父の名は我が父の名と一致する」という当時広く受け入れられていたメシアの身元に関するハディースが解釈される。即ち、メシアである条件として設定された「アブドッラーの子ムハンマド」という名を持つべきであるというファドルッラーに適合しない条件を廃棄し、その名にフルーフィー教団流の数的解析(文字神秘主義)を施すことで、当の条件をファドルッラーに適合するように再解釈していた。

同史料での議論は報告者の博士論文の埋まらざる欠落を埋める重要なラストピースであり、この史料を活用することで、14世紀末のファドルッラー生前から、活動の舞台をオスマン朝領に移した17世紀までのフルーフィー教団のメシア主義思想の展開を繋がる見込みがある。この研究成果は、従来の研究成果と併せて、2024年6月に査読付き論文として査読誌『西南アジア』研究に投稿し、また報告者の博士論文に組み込む予定である。

第二の留学成果は、ヌクタヴィー教団史料の収集である。同教団は、ファドルッラーの生前にフルーフィー教団から分派したメシア主義教団であり、報告者の現段階での研究課題の延長線上に位置づけられる。同教団に関する先行研究は限られており、イラン留学前は申請者もその史料の在処について詳細を知らなかった。博士論文以降の研究テーマの策定も今回の留学中の課題と考えていたため、上記研究課題遂行の傍ら、ヌクタヴィー教団史料の収集に当たった。実のところ、フルーフィー教団はもとより、ヌクタヴィー教団の史料の収集には困難が予想された。というのも、両教団の思想は有り体に言えば「異端」であり、イランの現政権の宗教政策からみて、特に外国人研究者に閲覧を易々と許可するとは思われなかった。事実、いずれの図書館においても、閲覧の許可・複写申請は一部却下された。幸いにも、複数写本の存在する作品の閲覧申請だったため、別図書館で同著作の別写本を閲覧・複写の許可が受理され、研究に支障が出ない程度の申請不受理に抑えることに成功した。しかしながら、報告者の研究に関わる写本資料の閲覧・複写制限は留学期間中にも強化されつつあったため、近い将来に外国人研究者が閲覧することは不可能になると予測される。ギリギリのタイミングでの資料調査であり、今後の研究に繋がる成果を挙げることができたことは、まさに僥倖だった。貴財団の留学奨学金なくしては、報告者の研究の進展は望むべくもなかった。感謝の意を記したい。

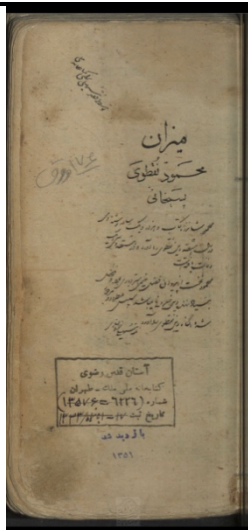


図 1 マレク図書館所蔵で入手した写本マフムード・パスイーハーニー著『神智の天秤』の複写データ。今回の留学で獲得した諸写本の中でも最も価値のある作品のひとつ。これらヌクタヴィー関連写本で今後 15 年は研究を続けられるものと考えている。



図 2 報告者の研究テーマである自称メシアのひとりムハンマド・ヌールバフシュの墓廟内の碑文。テヘラン郊外のスーリカーン村にひっそりと佇み、近隣住民も存在を知らなかった。現政権に都合の悪い「自称メシア」だったという点は碑文には記載されず、スンニ派を強制しようとしたティムール朝に対抗したシーア派の英雄として称えられている。2020 年に殺害された革命防衛隊司令官スレイマーニーの肖像画がともに飾られている点にイラン・イスラーム共和国を感じざるを得ない。



図 3 報告者が足繁く通ったマレク図書館前から見るトーチャル山。冬のテヘランは大気汚染がすさまじく、遠方まで見渡せる機会は数えるほどしかなかった。マレク図書館は、諸々の手続きが煩雑なイランにあって唯一と言っていいほど外国人が簡便に利用できる写本図書館である。利用申請から複写の入手までものの3日で完了し、いたく感動した(データの閲覧ならその場で許可が下りる)。イラン滞在中での感動ポイント堂々の一位である。入館前に近場のイラン飯屋で朝食のオムレットをかき込んでチャイを飲んでから図書館に向かうのが仕事前のルーティンといったところで少しワクワクしていた。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

申請者の留学期間中は、イラン国内は動乱続きであった。留学を開始した2022年4月はコロナ禍が一応の収まりも見せた直後であり、入国の手続きは煩雑を極めた。幸いにして、申請者は留学期間中はコロナも含めた一切の体調不良に見舞われることなく健康に過ごすことができた。2022年9月には、ヒジャーブ非着用者に対する治安警察の暴行死事件に端を欲した大規模デモが発生し、そこから半年ほどは心落ち着かぬテヘラン生活だった。当時入居していた学生寮はテヘラン大の近所にあったのだが、当のテヘラン大がデモの拠点のひとつとなっていたため、デモ隊のシュプレヒコールと警察の怒号、女性の悲鳴が寮にまで届いていたことを覚えている。通学に使っていた道路では車が燃やされていたことも印象深い。デモ以降は、大通りには治安警察が銃を携行して隊列を組んで通行者に睨みを聞かせており、恐る恐る行動していたことも覚えている。デモと関連してテヘラン大では大規模な人事変更があったと聞いており、外国人に対する扱いが悪化した。どうやらイラン人学生と外国人の接触を制限する方針に変更されたようであり、2023年8月には突如として入居していた学生寮を追い出されることとなった。一時は留学の継続を絶望視し、帰国も視野に入れていたが、粘り強い交渉の末、8畳程度の3人部屋を別の寮で宛がわれた。狭い部屋での3人暮らしは惨めであったが、この期間に研究が大きく進展したため、諦めて帰国せずに屈辱に耐えてよかったと振り返る次第である。

2024年3月に留学期間を終えるにあたって帰国許可が必要であることが判明し、イラン流の煩雑な関係期間たらい回しにあっての間には、イスラエルとの間で軍事衝突の危機に見舞われた。毎日ペルシア語と英語で事態の進展に関するニュースを探し、「まさかあり得ないよな」と思いながらも、これまでの人生で最も死に近づいているなと布団の中で毎夜思案したものである。留学中のトピックスとしてはこれらの経験を挙げざるを得ないが、イランの市井の人々は気立てもよく、彼らと接していて不快になることは一切なかったどころか、何度も助けてもらうことがあった。なお、東アジア人が珍しいらしく、観光地に行くと必ず現地民・観光客から共に写真を撮るように乞われ、20メートル進むのにも苦労したことはよい思い出である。

## 今後の社会貢献

申請者が今後なすべき社会貢献の最たるものは博士論文の成果を世に広く発信することである。申請者の研究課題は、歴史学の視座から、現代社会における価値観、特にイスラーム世界およびイランにおける宗教史に関する知見をアップデートするものである。この課題により、ややもすれば固定的になりがちな中東圏に対する日本人の視点を相対化することができる。発信の形態としては学術書になると予想されるが、より一般にも接しやすい一般書での発信も狙っていきたい。より卑近な社会貢献としては、日本人にとってはまだまだアクセスの難しいイランに関する情報の発信である。報告者が留学を開始した2022年4月時点では、コロナ禍を挟んだこともあり、まったくといていいほどイラン留学に関するノウハウが手に入らず、渡航後に四苦八苦することとなった。報告者がイランで培ったノウハウを後学の者たちに伝授することで、イラン渡航後に被る苦労を少なからず軽減し、学業に専念する時間をより確保できるようになるだろう。またイランに関する日本国内のイメージは未だネガティブなものが多く感じられる。報告者自身はイランのお役所仕事には辛酸を舐めさせられたが、善し悪しの両面を含めて、イランでの経験を身近な人たちから伝えることに努めたい。